

## 『英雄たちの大集会レポート』

### (I)

実際、私自身、深夜の雑巾がけには驚いた。そのほか、色々のことがあるが、まず、それからはいろいろ。雑巾がけをしているのは東京から参加したヨシダ・ヨシエだ。その単純な動作を坐って見ている僕の尻は我慢できないほど痛くなっていた。窓を開いて夜空を仰ぐと、雨はいつしかやみ、窓辺に手をついている。そのこと自体が冷酷に作品化されてしまったみたいな気になり「いったい、ここにいる僕自身は十二なのだろう」という強い疑問が襲って来た。

「十二」の意味もなく深夜の雑巾がけをジッと見ているという、奇異の感からの出発であったが、それが長時間繰り返されると、雑巾がけしている者とは全く別に「見る義務」めいたものが、からだの中に発生してくるのだ。そのことは、その雑巾がけの男とは別個に「見る義務」の個体として生長して、その単純な行動に参加していることになる。何故なら、これから先も見つづける『義務』を背負うからであり、事実見つづけたからである。しかし、同時に「こんな雑巾がけはツマラナイ」と本人に告げ、音楽家の演奏でもみようかとそんなことを複雑に胸の中で思っているうちに、この薄暗がり、この沈黙の世界に訪れる繰り返しの動作が自虐的な波動となって襲ってきた。

男は床を見つづけて決して「オレ」と眼を合わさない。決して「オレ」を意識しない演技なのだろうか。その癖、その階段は決して掃除する必要のない場所だという。そのことだけが変に心にひっかかってくる。飛躍した考えだが「オレ」と地球の関係は日常的習慣の中では決して意識する必要もなければ、無意識の中にも、また決して存在しないものだが、それが一度、意識されると、例えば火星とか、金星、それ程でなくとも、リングが落ちて、ニュートンの法則が生まれたように、人工衛星が飛んで、我々凡人は、はじめて実感として地球を知る。そんなことが「オレ」の中に目醒め、「掃除」という「オレ」とは無関係なものが、それにもまして「その男」とは無関係なのに、その無関係を遥かに越えたところで「見る義務」を生じさせて、それが「ナニカ」の源を作りだしているという考えが浮んで来て、すべての世界が、ここから発生しているように思われた。それは、いつしか神話に没入してしまった子供のように確実に存在する瞬間だと楽に信じられる時間—それにもまして「の沈黙」「冷たさ」「無意味な行動」が知的な侮蔑を越えた地平線で、「義務」に变革されるとき、それは反比例して熱く生命のように燃えあがり「見る義務に縛られたオレ達」がここ百道海岸に誕生した。